

編集後記

『真実心』第二十二集をお届けします。平成十二年度、新入生対象の学長講話、および宗教講座の計五編が収められています。

皆さんは本学で仏教を学ばれ、宗教講座なども聴かれたわけですが、今日、何かと世間を騒がしている宗教を見直すきっかけになったでしょうか。

昨年の暮れ、京都文化博物館で開かれた〈良寛展〉を見に行く機会があった。その展示品の中に、私が時折口ずさむ『草堂詩集』の一節を目にし、いたく感動した。それは、こんなにも粗末な紙に、何の衒てんいもなく、淡々と書き記されたものにしては、余りにもその内容は深刻であり、そのギャップに驚いたことにも由よる。ややもするとイメージのみが先行して、柔な良寛像が語られることが多いが、果たして彼は、無明（無知）の淵に淪くむ人間存在の危うさと哀しみを込めて、謳うたいあげているのだ。その一部を入矢訳（日本の禅語録 第二十卷）講談社）と共に掲載しておこう。

痛ましいかな 三界の客 知らず 何の日か休まん

六趣の岐に往還し 四生の流れに出没す

君と云い 臣と云うも 皆これ過去の讐なり

妻と為り 子と為るも なんぞ幽囚を出づるに由あらん

たとい輪王の位を得とも ついには陶家の牛となる

痛ましいかな 三界の客 何の日かこれ歇頭ならん

遙夜つらつら思惟するに 涙流れて収むる能わず

(なんと痛ましいことか、三界の人びとは。いつになればその流転はやむのであろう。六道の世界を行ったり来りしながら、四生の循環のなかを浮沈している。この世で君に生まれたり臣に生まれたり、どれもみな前世の報いゆえのこと。この世で妻と生まれたり子と生まれたり、その恩愛の囚われから脱け出るすべもない。たとい転輪聖王の位に生れついても、最後は陶家の牛となるのが落ち。なんと痛ましいことよ、三界の人びとは。一体いつが休止の日であろう。長い夜じゅう思いにふけてっていると、流れ出る涙を止めようもない。)

良寛は「痛ましいかな 三界の客」と繰り返すが、三界の客とは生死に迷う私たち自身のことなのだ。そして、そんな自覚もないまま生きている私たちは、真の宗教者（それを親鸞は「まことのひと」と呼んだ）が遙夜、独り流す涙の訳など知るはずもない。この深い悲しみとそこから生まれてくる愛（慈悲）こそ宗教と私は考えている。最後になりましたが、ご講話をお願いしました先生方には、ご多用の中、原稿にお目通しいただいたことを厚く御礼申し上げます。なお、本文の文責はひとえに編集委員にあることをお断りしておきます。

（編集委員）